
恋人代行

植田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋人代行

【NZコード】

N9110Y

【作者名】

植田

【あらすじ】

「恋人のフリをしてもらいたい」。ある事がきっかけで社長から恋人代行を頼まれた僕。社長はまわりつく女性たちを排除したかった。社長はフリを頼んだ相手が、本気の恋に発展しなさそうな相手を探していた。僕はゲームにしか興味がないためうつてつけだつた。そんな事を言つておきながら、社長のほうが次第に僕に惹かれていき…。

第一話 きっかけ

「よし、終わった」

仕事を終えた僕は立ち上がり、鞄を手に持つた。

「ゲームの続きを出来る」

腕時計を見ると二十時を過ぎたあたりだった。帰宅まで歩いて十五分、シャワーを浴びて簡単な夕飯で済ませたとしても二十一時前にはゲームを始められる。くふふとこやけながら、エレベーターに乗り込む。

僕は通勤時間が惜しくて、会社近くの安いアパートで暮らしていた。

峯島 僕三十一歳。ゲームに夢中になり過ぎて恋をする間もなく、気が付けばこの年に。結婚願望のない僕はゲームさえあれば満足だつた。いつかは大音量、大画面のテレビでゲームをする事を夢見て、マイホーム資金をせつせと貯金していた。

目標額まで貯金はまだまだ足りないが、ゲームのために仕事を頑張っていた。

エレベーターが一階へ到着し、扉が開く。早く開いてほしくてうずうずしていた。すり抜けられる程度の隙間ができると、僕は飛び出した。

早歩きで帰れば、十五分はかかるない。僕は少しづつ駆け足になつていく。

照明が必要最低限にまで落とされたロビーで、男の後を女が追う姿が見えた。女が男の腕を掴むと、男はその腕を払いのけ、口論が始まること。

痴話喧嘩か。

関心のない偉は彼らを無視してロビーを駆け抜ける。が、突然顔面に衝撃を受けた。

「遅かつたじやないか」

「ほえ」

顔に当たったのは、痴話喧嘩真っ最中の男の体だった。男は偉の肩に手をのせ、耳元で囁いた。

「すまないが、話を合わせてくれ

「何よ、その女！」

上品なスーツを身に纏い、妖艶なスタイルを持ち合わせた美女がヒステリックに騒ぎ出す。

「俺の恋人だ」

「嘘でしょ？ あなた恋人はいないうて言つたじやない」

ええ！？

突如修羅場に放り込まれた偉は動搖した。

これを切り抜ける方法が一択しか思い浮かばなかつた。

？ 無視して立ち去る。

？ 男に協力する。

頭の中がゲーム感覚に陥つた。

ゲームだったら絶対に？を選ぶ。その後のイベントが見たくなるから。

けれど面倒なことに巻き込まれるのもよしとな……。

偉は目を瞑り、考えた。

男は困った様子で偉を見ていた。

その表情を見てしまうと、？を選ぶと後味が悪そうだった。選択肢が決まると、偉は男の頬に顔を寄せた。

「いめんなさい。思ったより時間が掛かって掛かってしまって」

男の肩に手を当てて、彼の頬にキスをするふりをした。女に顔を見られたくなかったので胸に顔を埋めた。

こんな感じでいいのかな？

偉は男の顔をちらりと覗き込む。男は安心した表情を見せ、偉の肩に手をまわす。

「失礼しちゃうー。」

その女は頭に血を上らせ、ロビーから消えていった。その姿が見えなくなると男は胸をなでおろし、偉から離れた。

「すまない、助かった。君、名前は？」

よし、完了。

偉は名乗らず鞄を肩に掛け直して、足早に立ち去った。

「あつ、君ー。」

「今日はマジでやめて、恋愛ゲームにじよつと」

とにかく僕は早く帰宅してゲームがしたかった。

「峰島君、ちよつと」

翌日、僕は加藤課長から呼び出された。けれどいつもと様子が違ひ、通路の方から手招きしている。そして誰も使用していない会議室に通された。

中年太りの加藤課長はハンカチで額の汗を拭っていた。僕は課長の仕草を田で追っていた。

「君は社長と面識があるそうだね」

「……へ？ ありませんけど」

「おかしいな。さつき社長からつちの部署に『メガネを掛けて、一つに髪を束ねた女性が働いているだろ』って電話が来たから君だと思つてしまつたよ」

「……私しかいないじゃないです、その格好」

「だろ？ そんな君に、仕事を依頼したいそつだよ」

「仕事、ですか？」

課長は頬に手を当て、僕の耳元で声が漏れないように囁いた。

「社長がもう一度恋人のフリを頼みたい、と」

その言葉で、もやもやしたもののがすつきりしてしまった。

昨日の男は社長だったのか！

「お断りします」

踵を返して会議室から立ち去りつとした瞬間、課長に肩をがつしと掴まれた。

「ダメだつ。この話を聞いてしまつた以上、君に断る権利は無いんだよ！」

「ど、どうこう事ですか？」

「これは極秘なんだ。この件が実行できなかつた場合、それに関わつた人間はクビになる」

僕は課長の顔をまじまじと見つめた。びつやけり課長にふざけている様子はなかつた。

「嘘ですよね？ それにこうこうした内容でしたら、私ではなくても他に適した女性がいますよね」

僕はファッショソに無頓着だつた。黒髪を一つに結わき、化粧つきもなれば、安価な眼鏡を掛けていた。

「それが、口の堅さも条件らしくてな……。こんな内容だとは知らず、『彼女はどんな性格だ？』と聞かれたもので、うつかり君の事を先に話してしまつたんだよ」

僕の、口の堅さはお墨付きだつた。そもそも人の噂話には興味がないからである。但しゲーム関連の情報に関しての口は軽い。

「事情は分からぬが、峯島は一度手伝つているんだりつ？ 社長

が、出来れば他の人には知られたくないと言っている。俺だって困つてるんだ。峯島～、どうか助けてくれ！ クビになつたらカミさんござされるだけでは済まされないんだよお

頼むう～、と肩を揺すられて課長は懇願した。

課長は四十年代後半。お子さんは確か、上から高校生・中学生、下はまだ幼稚園児だと聞いたことがある。課長は必死に僕を引きとめるが、僕には何のメリットもなかつた。

「うせん臭すぎます。私は断固お断りします。それでは…」

真顔で敬礼し、課長めがけて手をこめかみから離してその場を後にした。

課長の「みねしまあああ」と悲痛の叫びを背中につけながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9110y/>

恋人代行

2011年11月27日10時02分発行